

江戸時代中期から後期の小袖に関する復元模作を通じた研究
A Study through the Restoration of *Kosode* from the Middle to the Late Edo Period

福島 雅子*¹⁺, 瀬藤 貴史*¹⁺, 林 智子*²⁺
Masako Fukushima*¹, Takashi Seto*¹ and Tomoko Hayashi*²

*1 東京芸術大学美術学部 東京都台東区上野公園 12-8
Faculty of Fine Arts, Tokyo University of the Arts
12-8 Ueno Kouen, Taito-ku, Tokyo, Japan

*2 京都文化博物館
The Museum of Kyoto

+ 服飾文化共同研究拠点, 文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: The purpose of the study was to elucidate materials and technique used in the production of the *kosode* made in the late Edo period. Investigation report and reproduction of the *kosode*, will be carried to help people to understand the traditional costume of Japan. Prior to the study, the preliminary researches of the *kosode* were carried out at The University Art Museum, at Tokyo University of the Arts, Bunka Gakuen Costume Museum and Kyoto Prefectural Library and Archives.

はじめに

江戸時代の小袖に関する研究は、これまで作品や文献資料の検討を主流に進められてきたが、近年は、作品の復元を通じた新しい研究方法が試みられている。本研究は、特に江戸時代中期から後期の小袖に着目し、文化学園服飾博物館および東京芸術大学大学美術館、京都府立総合資料館などが所蔵する当代の小袖に関して、調査および復元模作を通じた研究を行うことにより、小袖の様式変化や制作技術の実態を解明することを目的とした。

これらの研究活動により、江戸時代の服飾文化の一端を解明するとともに、広く一般に分かり易く研究成果を公開することで、日本の服飾文化を支えた伝統染織技法の保存・継承の動きを喚起する一助となることを目指したい。

方法

平成 20 年度は、文化学園服飾博物館および東京芸術大学大学美術館、京都府立総合資料館が所蔵する江戸時代中期から後期の小袖について予備調査を行い、その結果に基づいて、復元模作の対象作品を決定する。まず、上記 3 館の所蔵作品 14 点に関する調査を実施し、形態（法量）・染織技法・意匠・地質などの基礎データを収集し分析する。分析によって得られた成果を基に、来年度から復元模作を試みる 2~3 作品を決定する。

予備調査対象作品は以下の点から選定し、調査を実施する。

*1) kougei4mailbox@yahoo.co.jp

- ①江戸時代の小袖の制作・使用の様相を考える上で重要であると考えられる資料。
(意匠や染織技法に関して、ある様式の典型を示している資料、ある様式から別の様式への過渡の様相を示していると考えられる資料、使用者や使用状況が付帯情報から特定できる資料など)
- ②地質・刺繍糸・染料などの経年劣化により、制作・使用していた時代の状態と大きな違いがあると考えられる資料。
- ③調査結果の公開と復元模作の展示活動を行うことによって、服飾文化の研究者に研究活動上有用な情報を提供でき、また一般の来館者の服飾文化理解の一助となることが期待できる資料。
- ④保存状態、展示計画その他の事情を鑑み、調査の対象とすることに支障のない資料。

分析結果

作品調査と分析の結果から、江戸時代中期から後期において各階層が用いた典型を示すと考えられる以下の作例を、復元模作の対象として選定した。

①文化学園服飾博物館所蔵「浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖」

いわゆる御所解模様の小袖であり、江戸時代後期の武家女性が着用した小袖の典型を示す。白上げ部分には肥瘦のある線が用いられ、絵画的構図を巧みに小袖上に再現している。引解の状態では裏地はない。小鼓の革を表現する駒繡が秀逸だが、岩を表す黒糸に朽損あり。朽損箇所を補った形での模作を作成することにより、制作当初の姿を復元することができる。

②東京芸術大学所蔵「水浅葱地綸子柳に檜扇文振袖」

背面全体に左腰部分に余白を大きくとった動きのある構図で柳と檜扇を配した、寛文小袖の流れをくむ作例。袖丈 95.0cm の大振袖であり、江戸時代中期以降に袖丈が伸長した振袖の好例である。

精緻な糸目糊を施し、多彩な色彩を駆使した友禅染は、江戸時代中期から後期にかけての富裕な町人層が用いた小袖の典型を示す。

復元模作の制作

上記2点の復元模作に用いる生地（縮緬・綸子）の制作を、京丹后市丹後ちりめん織元田勇機業株式会社および京都府織物・機械金属振興センターに依頼。生地制作にあたり、オリジナルの作品調査のため、来年度に生地制作者が作品を実見し、より組成と風合いの近いものを目指す。



図1 浅葱縮緬地瀧に鼓模様小袖（拡大図）

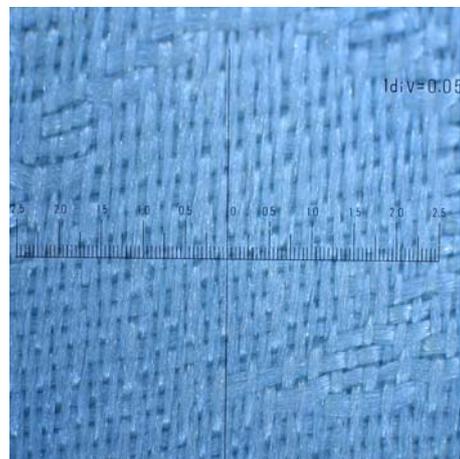


図2 水浅葱地綸子柳に檜扇文振袖（拡大図）